

梅
斧
叢
書

柴
邦
陽
止
書

十四

洋学文庫

文庫8

C 217

4



41- 7658

柴邦彦上書



天下は神法の多に其恩威と申す小越申す御
 事也 措規様天下を治むるも天の御徳に
 かゝ^畢畢を^畢申す御徳偏る多に御恩を
 申す文徳と申す天下中の人民 御上と申す御恩徳報
 有也亦^畢畢を存す御徳と申す御恩と申す御威と申す
 武威と申す天下中の人民 御上の威光と申す御
 小越の御政及御徳の御恩を御上と申す御恩徳報

権川書局

文明ありて兵學亦盛なり
道人多し風儀亦高し
忠義亦多し只今あり成大業
所獲下は起りては
五子や二万あり精兵も亦あり
万ふも亦獲りては
今日中國中一人名も亦あり
及後令度天竺より事
起りては力ばかりも智恵つても
將軍家も亦あり
ことと由縁討つるも亦あり
皆人存りては亦あり
威なりては事由縁あり
天下も亦あり
強し共大志量も亦あり
威光も亦あり
心も亦あり
相するも亦あり
終消して亦あり
おれも出たりては古の人の折衝
千つて外も

又消禍未だありては
武備も亦ありては
士も亦ありては
盜賊亦強理不慮の
儀ありては
餘力も亦ありては
共ありては
小るありては
の亦ありては
みりては

一可のこの海は車の支福一と一可のかけぬき
 可や山中小恩の自は自然威を籠り可威の自
 恩の籠る可の自は自然威を籠り可威の自
 徳く御政の由望しゆそ下我民真実とるを難き也
 は御恩の火の中は火の中は火の中は火の中
 包化^死して御威光受りて後成中の上右
 松ふふん我民思ふよく深達して小長して後令
 天下に由我威よ少ゆるゆゆるかき流教人口ゆく
 ころりかき後き由我思ふよく深達して小長して後令
 して流後き由我思ふよく深達して小長して後令

東の流洗を遊ゆつたる事

漢の二祖の帝帝宣仁の徳の

其後又文帝と帝程又仁政と施す我民を安んずるは後代に思はれど
 十代といふは十二代目と王莽とて其物と大り我民の徳は後
 有と是の世に又先武帝と帝程とて其物と大り我民の徳は後
 十代といふは十二代目と王莽とて其物と大り我民の徳は後
 有と是の世に又先武帝と帝程とて其物と大り我民の徳は後

小宗の政本源朝の難政とて 御尚書の由る徳の松竹とて
 十代といふは十二代目と王莽とて其物と大り我民の徳は後
 有と是の世に又先武帝と帝程とて其物と大り我民の徳は後

威と物ハ其の威光を

下といふは

加之小買き高が傑者て威光の透同は

由乃の唐土にて、楚王頂相^秦王符望日本多藏^漢回信長
右圖考を去るとして、由乃は此の... おおし

祖の教を交若くは三年の万々天に切絶へしめ、仁徳を教ふ所の若くは...
天に切絶へしめ、仁徳を教ふ所の若くは...
中の平竟曰君とて、予武威を以て、仁徳を教ふ所なり、

御苗家、由乃の 推遷様、由乃の 御明若様、由乃の 由乃の

と、由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、
と、由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、
と、由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、

赤印は、斗り正味、不減、口極、を以、^秘員、^秘員

有徳院様、は、御合点、は、御合点、は、御合点、

由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、

由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、

由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、

由乃の威を、中恩威兼備、其後、又、由乃の威を、

換へ下下極極と奉存又と役人にもあり陸りとも考へ海人皆やと
 豊よしくしめて上の御恩を難くしりるゆと辨りてよむは述
 若下とく九極の中と下下の者、此所江中と及うい難
 故也所中なる上上と遠くは威光の志は此所江も下
 上と下と下と常々争ひあはれりるゆと斗り此思ふゆ
 若と此故なく此を記あかすゆ中なるもゆ奉明表と此
 氣付下下とのこの中へ下の者も此威光を忠也た一友
 や此友即年や二年へも之也此へ御政及び此建背の
 下上と此故もあはれ十夜も十年も二十年も此政あ不
 来也と信後ひ難を一つめとよむは下知も此建背後此

此也来也と信ひ此信を御上上の政及び此故に於て
 下とく御上知も遠背は信を此也と奴と此思ふ下と此
 一々極難を此信へ御上へ信り御信あかすは此怨めしき
 とす信の極成行ゆ是と上と下と此信も此上上と此
 の勢と此物と所成天下一節也は南とてこの事天下大
 礼の基此この大きなる事、此中此世此法也
 有徳院様も能く存る此中此所此相と御出へ此是
 信りて、此来下とく、此難も上と下と述へても此
 此のおも此信、此信付も何斗、難有わつて後人も此政
 及と下も威光も此信に白論は今もたあらとく下

上州もつら〜川に入るも〜川に川多大成を奉給
其後校川の水ももたぬ老川 御河江不川出らぬ
家強者之河川之達人今子極を極る律掛不
川を人曲地杯と換給仕我すと川録年律の百此
其録年よお成り中のありて去年中も御河
の者と成ると西下色不の者今子とわ〜西下
信使律は〜も近〜不川と上極〜恩口川は立の給
つては当地へ居るは多給ぬ〜御河に判以裁
命りて者は御河〜不〜之家恩のりあては裁判
と遠背は今子と近〜ふ川方又江戸に其地は長

川に裁仕居海を後〜川を川は成小も遠背は御河
不川居出〜川も遠背は〜江戸に居出迄は裁
裁仕居海を後〜川を又遠背は江戸に居出不
川今子又〜江戸に居出を御河新おも川出
を御河新おも川出の川は川は御河川
〜川今子又〜御河に江戸に或百里給の御河川
従来は入川二百両斗矢部仕事と〜川川
之上を極〜川は御河の御河は御河は御河
御河と〜川は御河の御河は御河は御河は御河
及び川川は御河の御河は御河は御河は御河は御河

日中國中の美氏を天に
 將軍家の法を
 威を振る物なるは
 小児は
 志は
 由叶は
 と布この
 存存事
 と是下の
 何由氏の
 中何物

土民百姓の
 たるより
 我ら
 も田地
 由立
 唯
 と
 由
 承及
 又
 將軍家

するに由るに役人荒れし川上にも此は川上の由り也
 成給る者民乃理能と認ふ立て是し中役も此
 此乃此の下之とす也一を以て後へ其を以て此
 を専感言檢言少々此の事なるは六ヶ敷に末七
 澤を以てしる命り午才御也申言を此を以て六物の中
 出さるぬ候に仕りけるに役人荒の風昔も此候
 中此早先さす候に此に役人荒を前にも不便に候
 こそ
 公事河江も事由るに事なるに役人荒の風代な候に候
河江公事
 此とては川上の河役割のふ宜候言は候に候に候
 候に候に候に候

癡者智け者推系千石那るも候と云一は此の
 代友は中者海外行く此の事も十石七十八石の所
 漸く六百俵二百俵に候に候此の事も此の事も
 年貢の五割斗りに役目に成公事河江にするも自
 體裁判はらりお成不す候此の事も此の事も
 此の事も此の事も此の事も此の事も此の事も
 此の事も此の事も此の事も此の事も此の事も
 是給も此の事も此の事も此の事も此の事も
 此の事も此の事も此の事も此の事も此の事も
 此の事も此の事も此の事も此の事も此の事も
 此の事も此の事も此の事も此の事も此の事も
 此の事も此の事も此の事も此の事も此の事も

戸次は五振より存^早平核心^早長主五人組提致隊を
和と流人大勢を集め一化少^早坊明^早吹味も五反も三
夜もをり冷動も深五載以^早坊明^早右の如く氏
の強敵もあ成^早加^早河役人荒も只自分^早言^早沃^早
極よとらう存^早長^早戸^早を^早流^早人の口^早に^早合^早に^早出^早次
あふ出る大切も事^早洲^早詮^早美^早の^早行^早居^早不^早戸^早は^早る^早は^早中^早次
度^早も^早存^早何^早何^早率^早此^早に^早後^早津^早代^早友^早ハ^早先^早て^早之^早千^早石^早上^早の
中^早族^早中^早に^早作^早付^早と^早出^早に^早引^早越^早長^早戸^早と^早公^早の^早前^早次
三^早戸^早人^早宛^早も^早何^早付^早と^早出^早に^早引^早越^早長^早戸^早と^早公^早の^早前^早次
之外^早盜^早賊^早極^早に^早怪^早き^早る^早ハ^早皆^早と^早知^早る^早裁^早判^早は^早毎^早年

十二月は流役の考一人に戸次名出^早て^早戸^早の^早如^早く
又大^早の^早如^早く^早鑑^早ふ^早存^早の^早如^早く^早出^早に^早引^早越^早長^早戸^早と^早公^早の^早前^早次
後^早お^早名^早出^早も^早何^早付^早と^早出^早に^早引^早越^早長^早戸^早と^早公^早の^早前^早次
常^早任^早と^早不^早の^早長^早訓^早ト^早ア^早不^早氏^早と^早為^早不^早為^早と^早も^早平^早生^早と^早
吞^早込^早不^早戸^早又^早百^早姓^早丸^早の^早人^早物^早と^早ハ^早娘^早流^早と^早存^早長^早戸^早と^早公^早
事^早辨^早法^早未^早の^早苗^早も^早理^早能^早長^早と^早思^早ふ^早と^早ら^早う^早戸^早百^早不^早と^早公^早
一^早部^早と^早ハ^早事^早業^早市^早存^早と^早一^早國^早人^早民^早と^早打^早渡^早一^早部^早と^早
戸^早の^早如^早く^早自^早親^早を^早踏^早込^早お^早初^早る^早子^早ハ^早流^早碎^早美^早上^早下^早の
為^早あ^早成^早マ^早不^早姓^早と^早も^早豪^早族^早と^早者^早と^早ハ^早役^早人^早常^早任^早道^早不^早
長^早戸^早の^早如^早く^早横^早隊^早飛^早及^早と^早ハ^早仕^早事^早及^早付^早と^早者^早ハ^早流^早碎^早

志はらまふらうの悲しきものもはたかた極く百姓た
く身神と立立捨着るの仕場不立万不立境一
ゆけて之るの事年直と曰ふ事もあはれゆくは仲友
目前御流入くまをさるる上りゆく御身之
てそのまを御流の事悪も盗賊の詮言も終成
た御仲友の次盗賊は庭打ち果てあはれ九者
ハ悪く入込居りた自然と風儀も悪く其れ自神結
其の百姓たも情癡宿盗宿は極成りたゆか地
其物ハ年々限りゆたなりは年直の手に境
村里乃風儀の次身ハ悪くは成りたなりは終成

の百姓たも難言と極くは盗賊心入ては難申を極く此
是ヶ秘成りゆくも御仲友の乞ひ遠いと新田荒地
ゆたなりつてゆくも御仲友常免るをゆたゆたの二
言ゆたゆ

御仲友の乞ひ遠いとゆたゆたの二言ゆたゆ
何卒世と故ゆたゆたの御仲友も上りゆく通り
千ふり上の大才とあるは御仲友と法と篤と
御仲友村里も風儀結言も盗賊情悪打ちゆたゆた
此れ難言不仕那とゆくも御仲友も上りゆく通り
御仲友も上りゆくも御仲友も上りゆく通り

荒地多産成尸の由荒地に未嘗ゆるむに及ばず 御公
 儀の由帳面より察せらるる故に由役人元所宛入しるる
 感ししとていふを存せらるるに荒地に由年貞治一村
 一郡に割付申されしに其まきふるのけ場ありし石の形
 田荒地由せりて十石に及ぶるに形く百姓元の由兼
 境尸の由宛入のるるに由帳面より未嘗に由存せりし
 六石より形同し荒不尸と斗りか思ふに初を他と
 吟味して尸上の山脈なるの由冷動も全由せりて
 物も未嘗に由存せりて西へ東とて尸の由は
 至りも未嘗に由せりて又しるるに由存せりて
 御上

中令とていふと由一百姓に由馳馬の由成りし由供り
 出しし由海に故形同葎をも未嘗に由存せりて由
 へ未嘗に由砂入ありて地形の利害より未嘗に由
 作付馬の由吟味とて未嘗に由存せりて由葎に
 作付 入年へ由存せりて地形に悪く田地に未嘗に由
 尸より由存せりて初を未嘗に由存せりて由葎に
 又地形も宜く由教とて由存せりて由葎に
 与由年より由存せりて由葎に由存せりて由葎に
 葎を未嘗に由存せりて由葎に由存せりて由葎に
 へ葎を未嘗に由存せりて由葎に由存せりて由葎に
 へ葎を未嘗に由存せりて由葎に由存せりて由葎に
 へ葎を未嘗に由存せりて由葎に由存せりて由葎に

洞沃よまを言ひては代方と古勅の者。是はよ百姓を
扈の者なり。御ふん御波を築ふるも。是は元朝の氏に御ま
事なり。なむ。

大い多き只去氏百姓に御り候と申り。上と申せ。一週
く去の只今とくは改る言。百姓たも。おむ。よ。おむ。か
る。は。ゆ。を。と。を。更。何。の。角。の。と。子。等。一。職。前。を。無。く
事と馬鹿に候。申上。は。上。は。才。神。は。為。と。其。れ
事。も。マ。上。は。也。想。よ。申。の。才。神。と。物。ハ。平。人。と
ハ。遠。ハ。天下。申。の。去。ハ。富。饒。よ。を。出。ゆ。を。事。り。不
。天下。申。の。若。を。富。饒。と。波。を。事。る。と。其。氏。の。農。師

樂と申。極。波。り。又。一。事。は。元。朝。の。農。人。を。申。物。神。亦。せ
川。波。を。申。の。多。人。と。い。を。申。り。申。者。多。は。元。朝。の。上。か
危。子。後。は。也。い。ま。い。ら。成。農。人。お。樂。と。は。元。朝。の。極。か
は。改。る。を。申。ゆ。ら。六。等。氏。表。と。申。を。申。上。後。只。を。と。申。り
言。を。百姓。た。才。神。也。一。思。く。右。事。り。申。る。農。人。事。
よ。高。令。お。申。り。御。の。る。元。朝。の。同。と。申。す。申。り。後
は。た。を。人。た。の。お。波。と。申。り。ゆ。也。と。二。三。千。年。と。申。
と。り。の。高。人。よ。お。申。り。申。る。御。の。申。多。く。お。申。り。申。
也。は。元。朝。の。農。人。の。才。神。と。高。人。と。申。事。り。申。り。は。海。外
天下。の。表。徴。よ。其。年。の。事。り。申。る。の。は。元。朝。の。才。神。と。申。す。

いづるをたはたしむるもよむと申す通り日中
天の命は形をて人臣の勤を奉りて天に
心をかけしやうをたはたすか かくも
たはたすか かくも かくも かくも
御上は御事ふりて申すは御事
と能く心なほ^解をてしは心をもて天下
民をたはたすは御事ふりて申すは御事
布施初徳をてしは御事ふりて申すは御事
知ら天の命は形をて人臣の勤を奉りて天に
御事ふりて申すは御事

古の聖人は海国窮天縁水鏡とて新氏の国窮
はたはた人君の實力の豊と申すは御事
是れ是れとて一日は御事ふりて申すは御事
境多しは御事ふりて申すは御事
天の命は形をて人臣の勤を奉りて天に
御上は御事ふりて申すは御事
奉りて天の命は形をて人臣の勤を奉りて天に
下を平しは御事ふりて申すは御事
習^習ふるをてしは御事ふりて申すは御事
御事ふりて申すは御事

かゝつてつゝし事たりと名入るなり

御代は高家し天りとは治史と伝はるは又往つては
武威と名のりて伝はるは又治史と伝はるは又往つては
と名入るなり昔より今日まで傳はるは又往つては
御威光し正味とゆふ事なり事なり事なり御威
大名とは雄中とゆふ事なり事なり事なり一天中とゆふ
の出来り伝はるは又治史と伝はるは又往つては
有る事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
御代大名とは雄中とゆふ事なり事なり事なり事なり

有る事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
家中し事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
家柄小味とつりて又事なり事なり事なり事なり事なり
名なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
名なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
知り事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
馬物具も事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり
事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり事なり

勢の四方の由是もあらずして上段

大名勢之仕より、有徳院様より此若芳に召寄せ

此御書付代、¹⁷¹⁶此若芳に召寄せ、此御書付代

より、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

御書付代、御書付代、御書付代、御書付代

見込申と又過すに申は愛なる一母とあ具申りあを
益、夫是出入お何種と申申也申上と又申の申引
越、お入る存と又振別有と申上申りて風雷を
思ふ事候申と申と申老人小兒抱と申と病元は
の又と敵人は申申のと申して申^非^非と申と申
病治の海と目と申と申と申と申と申と申と申
の夫知^子と申と申と申と申と申と申と申と申と申
信^子と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
つと申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
ゆると物入申と申と申と申と申と申と申と申と申

又外^子と申と申と申と申と申と申と申と申と申
仕と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
は、一^万と申と申と申と申と申と申と申と申と申
多何の事も申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
二^万と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申

中役人元一上等の口許にて身公仲間と制む
上へ山蔵威通判の格やる物もさる何年大なる
とも馬の山蔵味と在り候へば地味多下と在り
高小石伝へてなる地味も多し^取なり作らる大者
能上も多し候へば^取可やと在り候へば又地味も
勤生も格別辛事も仕と上外と在り候へば
江戸迄利も地味も多し^取あり候へば又地味も
四五千石も在り候へば作付して是も十年の月俵
城に近國神代仕候へば却る傍にも十年の月俵

前記の如く政績と申書にやうに諸國を治りて大なる地味と在り候へば
此の時代勤生の物も多し候へば又地味も多し候へば又地味も
多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば

軍の一時もあつたはる時を以て其の地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば

只今いふ通に役人元一^取と候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば
又地味も多し候へば又地味も多し候へば又地味も多し候へば

後帝一或時人よ相終^はく六也之^も 終を^は後^に行^はく
神嬪^の 臨^りい^ふは^いぬ^る 好^まむ^る 終^をの^りに^て 八^は 終^をと^も 終^を
無^きに^て 六^は 不^た 終^を 又^も 上^を 忠^を 終^を 終^をと^も 終^を 終^を
信^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
夫^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
の^りに^て 清^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
多^く 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
に^て 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
神^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を

中者^は中^と 中^と 中^と 中^と 中^と 中^と 中^と 中^と 中^と 中^と
終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を
中^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を 終^を

或ハ嬌子所出りたも親出也言連り人々を度出動不仕那と
P極多ふ大名も有く出たつて及^レPは是の言ふ趣くも一
万石ハ何れ^レ十萬石ハ何人とも身上と世世の言連らぬ
上言富も信人出たり極相和^レPは池より作れりて大
名身上と為^レ成^レりてなる

上言富も信人出たり極相和^レPは池より作れりて大
名身上と為^レ成^レりてなる
上言富も信人出たり極相和^レPは池より作れりて大
名身上と為^レ成^レりてなる
上言富も信人出たり極相和^レPは池より作れりて大
名身上と為^レ成^レりてなる
上言富も信人出たり極相和^レPは池より作れりて大
名身上と為^レ成^レりてなる

能治之百姓を憐^レる家中に金もも 潤は小^レ子
其^レ言ふは^レ此^レ意^レを^レ成^レりて又^レ言^レ格^レ亦
及位^レの^レ是^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは

御禮平也息^レと^レ施^レり^レ風儀^レに^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
是^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは
此^レ言^レは^レ上^レと^レ言^レは^レ其^レ言^レは^レ大^レ名^レは

旅いたよ兵中初遊うたよ兵中初遊うふな句端上
 一は陣立の少子死と隨分急夜お極り兵中一た
 帳面目録をよ紙の上と給景と耳とと清のき表紙
 指^水紙と中物多中と場を又と出ゆ言六存と節後々の
 遊り六ふ案あ言由在れと上まとの由役人尻而も極
 兵場初と駕と平々不存ゆ六^帳の射分皆十方よ言^暮
 少用よ兵之不中あ言由在れ故令一月や二月教へられ
 是又〇下と志六言ハ以春迄不中初言由在れ是と縁
 少陣之勢古言作付りて天下と身人尻をば給ゆと
 工軍初りや中初言由在れ是と縁

何とゆゑに氣味悪くてもなる。未急不中なる
 有徳院様。作付り給う鹿嶋極事をも
 中殿よ言作付又由列由傳之^中と名張中及少陣
 之の通りよ狂給り不姓天^中と難言少も未急不中
 天下の由夫邊も多し城り不中極と手移りて一年
 二三五夜もも言作付りて少言作をよ絶れとるも括
 別由殿よ五軍由役人尻由高尻下ハ由向公思淋とれ
 少よふま言自然と由由よ兵之。場前をよ春迄マ中
 手ありて上言兵後をとあ勤ゆ由高尻とけ旗由後炮
 未と兵分の志と一縁あり徒を力打と働のよよ之由

中人教を引也。一、^一とてゆたなる。折しては、附を以
 或て川とありありと、^一なる。派をたよして、^一陳を何
 と張る。如何なる時節、^一接境を合ふ。よ。能く何れ、^一城
 よう。派用ふ。と。形を、^一此身と。抱く。々々。能く能く。は。込。若
 も。上。は。櫓の時分。を。此。中。知の。ま。に。利。は。よ。く。人。数。は。
 一。引。也。一。ゆ。た。なる。は。獲。取。る。ま。や。下。直。中。極。よ。く。派。は。は。
 是。よ。く。兵。学。出。精。は。る。一。の大。お。を。る。勅。急。不。中。極。は。是。
 是。よ。く。老。成。人。の。出。来。^在下。は。何。と。守。る。右。二。ヶ。極。は。る。子。小。は。心。を。は。
 用。い。は。極。は。は。旗。布。一。雨。一。小。才。志。ハ。子。塗。六。法。ハ。出。精。
 仕。大。才。志。ハ。兵。学。軍。制。小。出。精。は。敢。は。敢。は。一。と。い。ふ。言。之。也。

一、^一職。を。く。一。心。力。は。極。一。一。海。軍。は。自。身。は。兵。部。の。隊。と
 一。四。五。年。極。一。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の
 一。回。を。下。さ。り。馬。は。兵。は。一。近。人。家。ホ。ル。出。来。仕。上。一。兵
 一。学。軍。制。一。每。有。幾。人。一。出。来。仕。上。付。一。一。と。い。ふ。事。ハ。十。五。百。
 一。の。精。兵。ハ。未。だ。一。極。一。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の
 一。不。一。及。信。州。朝。一。新。一。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の
 一。中。一。事。何。れ。唯。今。天。下。一。大。平。一。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の
 一。事。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の。一。事。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の
 一。下。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の。一。事。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の
 一。後。一。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の。一。事。一。派。成。自。能。と。は。旗。本。風。脚。も。通。り。共。一。年。の

權規様

台徳院様を奉仕彼の有り合及此合致此事多き此陳
中よきやとる林道とて誠意に海程を此守るは事
候は此記録を此守るに可き事也

御も平様より此文徳を慈より成る氏活業
切の天り此由書候は此於今御代より此徳
候は此守るに可き事也

常憲院様此子文此好むは此は此上向此浮
氣ら此好むは此の事也此道は此子文此守るは
上下に此道は此守るに可き事也

此有る此の事也此改るは此の事也此改るは此の事也
此好むは此荒井能候は此守るは此の事也此守るは此の事也
此子文は此守るに可き事也此守るは此の事也此守るは此の事也
此守るは此の事也此守るは此の事也此守るは此の事也
此守るは此の事也此守るは此の事也此守るは此の事也

有徳院様天下に此改むは此の事也此改むは此の事也
此守るは此の事也此守るは此の事也此守るは此の事也
政要と書し海程を此守るは此の事也此守るは此の事也
此守るは此の事也此守るは此の事也此守るは此の事也
此守るは此の事也此守るは此の事也此守るは此の事也
此守るは此の事也此守るは此の事也此守るは此の事也

解法は仰付の上後を悔了りしは宝形物と六諭
御書と書し和解をすも仰付

御上様は子ありし中にお成りゆきと上諭
候名書と物も仰付と外は改々くるは例宛候
中存るは延びし中は長く申す事なき事
存念し趣を残りしと

有徳院様も申すしは延び改々正しく申意
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事

御上様も初之西の御丸と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事

候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事
候は申すは延び候と申す事なき事

。とて一旬論は慈悲と云ふは、
一は度者たる事は、
この月の先下は、
今は左の事、
有る事と、
は後にも一、
亦天下中、
は用にお、

ははを、
予あり、
はる荒、
御上、
くは後、
ては金、
取次、
付を、
海、
ハ、

一は儒者にして而して字文を能くする人の定
 りて其の才のぬれ物といひはるははるの由あり由は其の
 りるより引入らるるなり古色く字校核と云ふは字の
 校核の由なり元南時侯小中乃の通りしと云ふは字の
 由る先出後人を初て中て由る元小善法極し者なり
 海はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 海はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは

一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは
 一はと云ふは一高の態よてあり由るなりと云ふは

心者友位ハ中下可成ニ目安濟シクモ
 斗儒者ト出ルルニ成ルルトモトモ目安物
 ハ手代也故極シ者モ未済ル儒者ト出ルル
 及シ不ト多クモ何物ノ人ト使ルルモ
 成ル物ト出ルル儒者ト手代者位ハ
 未済ル成ルルモ手代者位ハ向海而
 P形トシテ用ルルモトモトモトモ
 心トシテ用ルルモトモトモトモ
 学文ヲ教ルルモ深ク用ルル者モ未
 者トPト及上トシテ学文トPト物ト

学文ハ長袖ノ役形ノ是切形トシテ
 允得学文トP物トシテ果仁義忠孝ハ
 の中ニ成ルルルモ引立テ去ルルル
 儒者ト出ルルモ此物トシテ二人ヤ
 講新斗トシテ侍ルル儒者ト出ルル
 中ニ成ルルモ此物トシテ侍ルル儒者
 七人ト出ルルモ此物トシテ侍ルル
 十人ト出ルルモ此物トシテ侍ルル
 此ハ大抵トシテ出ルル物トシテ

上は改訂の者を書し、下は書とる又は光中書
成は見し上より作付し、成は書し、成は旗本に而
立身し、種は女向、對客か、是か、このは、お藝形と
唱、P、の、ま、き、い、各、長、は、つ、ら、上、ら、う、取、仰、付、ら、る、も、我、ら
よ、字、文、書、も、属、し、人、物、お、情、と、P、と、を、め、ぬ、故、右、の、め、は、
改、訂、し、作、出、ら、る、と、上、ら、格、別、人、物、お、情、は、情、見、て、忠、孝
と、お、取、ら、ぬ、格、あ、ゆ、ぬ、と、も、格、取、も、も、仰、付、ら、る、不、
く、お、取、ら、ぬ、仲、乃、改、訂、し、る、目、は、是、く、用、取、し、る、心、
は、是、玉、し、仰、付、し、は、旗、本、に、而、し、目、は、是、く、心、
付、く、格、取、し、る、も、凡、儀、宜、し、る、取、ら、ぬ、取、ら、ぬ、

教とP物ハ人ノ目以是を名し、格と改訂し、行要と、忠
く、目、を、是、る、ハ、格、取、の、心、を、是、る、也、
P、人、を、是、る、と、天下、取、し、一人、を、是、る、と、天下、取、
と、P、の、天下、小、目、は、是、る、也、
御、南、代、は、此、格、取、中、物、世、に、在、ら、ぬ、一、つ、の、格、取、也、
先、之、一、は、改、訂、し、古、格、也、P、物、取、し、る、心、
今、中、格、取、し、る、心、は、改、訂、し、古、格、也、
何、る、を、是、る、仰、付、ら、る、も、格、取、し、る、心、
出、書、し、る、作、付、し、る、心、は、改、訂、し、古、格、也、
と、い、は、し、る、心、
御、上、は、此、格、取、し、る、心、

の由以勢を修めたるも一は持重の振立御行の
ては、後何れにの由りたるも下は修め成ゆとも及不
下の上を歌き、下は修めたるも 亦成不下 御代は由せん諸
君を指めくお知し、行用 志なきはあつたぬと存ぬぬ
は、人を引上勵し、下は修めたるも 名譽と下は物と賞罰
への心を勵し、下は修めたるも 物と賞罰と一命を抛と
を、下は修めたるも 切つたを、下は修めたるも 平素に世に
の後代は、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 名譽と
下は一命と、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも

初は功業は、下は修めたるも 尚日には存せざるも、下は修めたるも 下は修めたるも
海平の府は、下は修めたるも 後代に美名著し、下は修めたるも 下は修めたるも
初は早性、下は修めたるも 仕事も、下は修めたるも 尚分は仕立、下は修めたるも 下は修めたるも
海平の府は、下は修めたるも 後代に美名著し、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも
下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも、下は修めたるも 下は修めたるも

先商のふるりとして後進とて懦弱の心出来り
 て天下を治りつるに敢てハ物に非ず人の心を引き
 去平人々賞罰をさしふるに依りて志をたじたる
 ても名譽と物と世に守るるに事なく了りて其罪深
 して是を以ては賞罰を収むるに長と結ばしめて五人
 のちからかきしめて非ざるを商分の由賞罰に何とて平
 存此後代りの同法候なりとて商時めり成し慶や
 能く連て名譽よも無付しむるに不仕りたるは是も
 仰付ゆともし名譽のつゞきを以てのしむるに
 能くは軍中なるも一は法度の数とて非は是なる

帝はは是を以て仰付しむるに敢てふりて故世も平國
 御上の由奉ふに此業は天下にも是を以てははは
 此れ天下を治めりし人は人の名を惜みしは
 を由るを以てははは人の名を以てはは
 惜しむるに上之不忠はは物に由りて是を以てはは
 最し物をし之を以て是の者の傳記ははははは
 へ云ふ邪心を以て是後代に傳へしははははは
 人を以てははは人の心を以てははははははは
 商分を利縁としむるに是も天下に大功を以てははは
 何事

日本書紀... 世に... 何事...

上今て中記録所と由之り此中此年事ありや
 大司く由後人流く傳記を書けり或は何事と中記録中
 ハ是のるを中上師の師天下此由る小由成り何事と
 中記録事あり何てのるを此中代のる小由成り何事
 律義小由後人何事ハ私教止上ハ不忠由許く好て中記
 後代ハ傳く中記録は中記録傳記ハ後人流く先代由後
 人衆く事ありて名譽の後代ハ何れも是の中記録義あり
 存悪き人く悪名の後代ハ何れも是の中記録をくといふ人
 多んや後代ハの中記録に好り好り引くや
 有々そのハ此中記録の事ハ不忠由許く好て中記録

孔子作春秋乱臣賊子畏と中記録は孔子の春秋
 と中記録は此の事ハ乱臣賊子と悪名をて書きたり
 此の事ハ後ハ礼長鍼子た悪名と後世ハ何れも是の中記録
 知中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて
 此の事ハ後ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて
 此の事ハ後ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて
 此の事ハ後ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて

盗賊のハ後ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて
 危角悪意絶不中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて
 戸前をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて中記録の事ハ乱臣賊子と悪名をて

例一景強入を扱水亦、海方中、馬田田快取振
人足を這りけ、中杯中極し、支数ケ交承及、Pの戸
御膳下、并御状、く、由收、ね、白ひケ振、る、の、は、は、は、
渾、と、改、不、存、悽、景、送、を、及、と、P、は、思、つ、る、の、に、
凡、儀、を、ひ、や、う、あ、そ、く、名、氣、を、六、後、く、も、り、く、上、は、
中、の、場、を、う、つ、と、大、き、く、天、下、に、改、め、く、に、由、那、丁、の、
中、を、お、め、唯、今、御、威、勢、つ、と、う、御、盛、り、と、幸、方、
石、一、百、兩、石、大、名、を、ち、く、と、も、由、切、せ、ふ、と、取、り、
少、の、小、盗、人、出、り、と、も、改、め、く、に、由、那、丁、に、は、
と、追、取、ら、う、と、さ、る、と、あ、ら、う、世、所、之、に、古、く、天、下、の、礼

ま、い、を、考、へ、る、多、く、盗、賊、を、り、る、起、り、
七、も、目、中、の、古、代、と、も、法、盜、と、P、料、の、十、五、
入、り、深、及、人、も、同、深、小、り、付、く、る、に、由、那、丁、先、先、
至、り、作、付、く、目、中、の、極、し、と、拍、P、敷、し、法、盜、口、
も、田、中、も、あ、ら、う、由、那、丁、の、平、生、手、中、の、者、へ、思、
令、根、を、い、い、と、ま、い、の、法、堂、大、勢、を、と、
由、立、公、合、を、捨、り、中、の、一、以、年、又、百、と、七、百、
中、承、及、い、ち、り、極、し、者、一、面、向、ハ、一、通、り、
長、中、子、下、の、者、を、也、と、い、く、御、よ、き、
と、後、世、は、長、中、の、一、也、而、く、者、の、
と、融、存、長、中

ぬらひ^あ味も^く^けの^りあ^らん^たと^し盗^ひも^た絶^えず^農業
 も高^貴と^不任^只人^の金^銀と^孫五^十生^のあ^後送
 何^のゆ^えも^とけ^りあ^ら者^有と^しけ^りあ^ら及^んじ^は自^自親
 子^とし^て盜^賊大^作も^不任^ゆゆ^たと^しり^者八^方と
 ぢ^者人^あぢ^に錢^室を^と平^たた^く旅^人を^者の^中自^自を
 紅^美氏^を悔^しり^た尤^平之^自才^を下^して^思ふと
 快^しり^もて^思違^違百^倍す^べく^は上^世上^世豊^を
 活^物と^はし^ゆ中^の財^をも^はら^しめ^り抑^上と^しは^威乞^をと^らま
 ず^最悪^之を^其手^にて^早續^かり^上世^上活^物と^しら^ぬ
 中^の活^物と^して^もも^出来^りと^大勢^を乞^を集^めは^らぬ^心

八百^に賊^人誘^ひさ^ると^家出^し入^仕御^之儀^に此^の儀^は
 手^向い^仕な^すと^不中^の其^内を^少く^も思^ふ
 と^ゆ覺^ゆゆ^りて^世上^を強^まる^を成^すり^編と^成る^には^しめ^られ
 廣^劫斗^をも^目前^に九^鬼長^の者^を呼^ぶが^くに^彼と^思は^れ
 先^祖盜^賊と^中の^者を^めづ^りた^ると^後大^名と^思は^れと^り
 中^の者^をハ^ハり^押と^しゆ^らり^のし^ゆ代^千年^代
 長^の是^をも^心の^事と^さす^と未^だも^推平^と考^へる^者
 あり^と思^ふも^思ふ^も思^ふも^思ふ^も思^ふも^思ふ^も思^ふも^思ふ^も
 中^の先^高指^高と^古と^した^と進^履と^押込^する^儀
 未^だも^思ふ^者の^民の^強者^を成^する^には^しめ^られ

盜賊絶ふ事不世本をゆひし好む人分帳と及切

心とを多し救出あり成世後の人の事厚を徳も自

中世とていふ事平ゆねは作付のて其上三十一家

牌と中物山山山はじりて盗賊とわく成成り

と平好ゆ人別帳及切の目令のゆりて何れ何れ

上書記のゆり大徳也きふゆりておんといふゆり

上三十一家牌のゆり三陽明文集と書記のゆり

故は元大坂美諸海道をいふゆり代を成りて之の

お成りゆり何事右といふ法を成りしゆりて候

織の記と絶とPのゆりてゆりゆり先沙城下

田舎ゆり平人の難ゆり任長候ゆり成成りゆり

ゆり大なるゆりす天下のゆりゆり為成りゆり

ゆりゆり

ゆりゆり

ゆりゆり

湖川

栗山堂書抄

是下之故たり切不知之

芝野彦助自筆

村尾氏宛書以写之

